

## 転換期における教育革新を考える

### 教育革命への提言 - その2 - より

財団法人 能力開発工学センター 所長 矢口 新

#### 1 過去の延長線上に教育改革を考えることはできない

教育の改革をするという、我が国ではすぐ制度をいじくることを考えるくせがある。それは明治以来の外国模倣の伝統である。六三三制の次には五四だとか、六四だとかということが問題になる。幼児教育ということが必要だからイギリスのように一年早く学校へいれるという。すべてこういう思考は現在の教育の延長線上に次の制度を考えるという思考である。中学校の教師は中学3年は短かいから4年にしろと言い、高等学校側は高校を4年にしろなどという。官僚が予算を毎年何%かふやすことが発展だと考えているのとよく似た思考である。こういう思考は現在の方向は間違いないものであって、それを量的にふやすこと以外に考えられないという思想である。誠に天下泰平の思想である。危機に対処する転換というものが無いのである。

生涯教育という言葉が流行しているが、これも延長線的傾向が多い。学校教育の成長は行く所まで行ってしまったから、あとは卒業後の教育だという意味で、生涯教育なのである。その教育の中味はどんなものかを余り考えもしないでもっともらしい議論が横行している。一体今のような教育を長くやればやる程よいというような保証があるのだろうか。今のような崩壊寸前の社会をつくったのは、とりも直さず人間であり、その人間のそういう破滅的行動は多分教育がつくったものであろう。少くともそれを防ぐ行動のとれる人間を作らなかつた。そういう人間の教育がそのまま続くのでは、教育が長ければそれでよいものだと単純にきめるわけにはいかないのではないか。

教育の体質を転換するなどという考え方はなかなか生まれないものらしい。教育の革新という、すぐ百年前からやって来た近代化という言葉が浮かぶ。近代化とは何かというと教育の機器を使うことだという定型思考がある。ここにすでに物、機械に対する現代人的盲信があるのであるが、こういう思考の仕方は、もう一つ転換に対する不感症的な思考である。近代教育の体質というものに全然目が開かれていない。現代では教育の内容という言葉でよばれているのは、結局は教科書の中に書かれた「もの」或は「言葉」であるが、そういうものを人間に「与える」或はもっと極端に「つめこむ」などと考えている。そういう考え方自体が問題であるのだが、それからどうしても脱皮できない。そういう人間の外にある「もの」や「こと」それを言葉で表現したものを、与えたり詰めこんだりすることが、人間を育てるということにつながると考えている。それが人間の働き、生きて行動する人間を見失わせていることに気付かない。言葉をおぼえることが、生きた人間の行動に直接つながらないことにもはっきりと気付かない。そうして教科書という抽象的なものを前にして人間の行動を抑制して生命なきものになっている。こういうことに気付かないで、ただ機械をいれれば、能率があがり、教育の進歩につながると考えている。機械にすれば益々だめになるであろうに、現代教育の考える近代化とは、益々人間を見失う方向に走って行く如くである。

つまり教育の体質の転換ということが必要だということがつかめないでいる。それは教育の内容といわ

れるものが、本当は内容でなくして、唯の材料にすぎないこと、育てることは人間自体なのであって、人間の行動内容こそ、教育内容だと考えられるようにならなくてはならぬということである。だから行動こそ教育の全てといって過言でない。すべてわれわれがいまの教育の内容と考えているものは教育の材料、手段にすぎないであろうに、その材料を与える、おぼえるなどと考えるから誤った考え方が出て来る。そこには、内容といまよんでいる教科書に表現されたものや教師の言葉をおぼえれば、行動が育つという誤解があるのである。誤解というより迷信というべきではないか。しかしそう考えることにより、人間に対する理解が行き詰ってしまった。人間の行動そのものがどういうものかを見なくなってしまった。しかし端的に言って、経験上われわれは、言葉で教えられたこと、知識としてもっていることを行動に移すことができないことを、いやという程よく見ている。人間というものは、知識を与えれば行動できるというような簡単な存在ではないのである。そういう点から、行動そのものをもっと究明して、人間の育て方を考えるべきであるのにそういうことをすっかり忘れてしまった。そして、教材を教育の内容と見あやまって、それを「与える」こと、「おぼえる」ことが教育だと考えて、もう疑わなくなってしまった。人間の実態をみることを忘れてしまった。それが教育の墮落となった。

教材の精選ということが云われる。教材そのものをおぼえていることが大切なのだと考えていて、多く知っておれば、それだけよいことだと考える人にとっては、精選などはくそくらえということになるろう。

そういう思想で視聴覚教育とか、教育工学などが論ぜられているが、それでは教育の体質の転換にはなるまい。依然として百年来の教育の延長ということになるのである。視聴覚教育とか、教育工学の思想の弱点は、結局旧教育の延長線上に未来の教育を考えているということである。そして最も大切なことは、未来の教育の根本的性格から新しいシステムとしての学習の場のあり方がきめられて来るのであるのに、基礎となるべき将来の教育の全体像が考えられずにいるということである。つまり、教育の目標となるもの、具体的な人間の行動の仕方の像からはじまって、そういう人間が形成されるための媒介となる教材、その教材に対して行動する学習者の行動のあり方、それらが構造的に明確にされて行く過程で学習の場の姿もきまって来るのである。視聴覚教育とか、教育工学といまわれているのは、その学習の場の問題なのである。

## 2 過去百年の教育は手抜きの教育であったということ

一般的に教育の現場とよんでいるのは、教育者と学習者があって、そこで交流し、学習者が新しい行動の仕方を身につけて行く場所である。そこには、われわれのもっている教育というものについての考え方、行動の仕方が集約的にあらわれている。いわゆる教育の制度といわれる学校の体系や、学級の編成だとか、教育の内容、方法に関するさまざまな規定も、実際にはその教師と学習者の行動の場面で生きて働いていると考えなくてはならぬ。

この最も集中的な表現としての現場のつくり方にあらわれている現代教育の考え方、行動の仕方とはどういふものであろうか。われわれ自身がその中にあるので、それを客観視することはなかなかむづかしい。江戸時代の教育であったら、われわれはそれを他者として見ていろいろ評価をする。社会の思想の中にも位置づけることができるが、不思議なことに、自分自身のことになると見えないのである。しかしいまや社会が大きく方向転換の時に当り、その方向転換をなしとげ、未来の社会をつくる人間を形成する役割を教育がねらうとするなら、百年前から今に至る一貫した教育の現場がいかなる現場であるかを評価して、そこから新しい現場がどうあらねばならぬかを考える必要がある。

そういうことのためには、過去に人間が営んだ教育現場の姿と比較することも大きなヒントになるであろう。そういうことを考慮にいれながら、新しい教育現場のあり方を探求してみよう。

近代教育以前にもいろいろな教育の現場があったが、近代教育と大きくかわっている点は、生活と教育とが近代教育のようにはっきり分離していなかったということである。そのことが中心になって、さまざまな具体的な形態のちがいが見られるのである。たとえばそのことは、家庭と教育の場との区別がはっきり分離していないということにもあらわれている。中世の武家は、家庭の中での生活の場が即教育の場であった。郎党が主君の侍の守役となって、一日中生活の仕方をしつけるのである。それはだから極めて行動的な教育であったといえよう。その生活の仕方をしつけられるそのことの中に人生観もあり、人間の知恵の働かし方も与えられた。現代の知識を与える教育も、もしそういう場におかれたら全く変わった姿を呈するであろう。現代の教育は総じてそういう生活の場から離れて、しかも生活の仕方を教えようとする矛盾におちいつている。つまり単なる観念的知識になるのである。それが能率がよいことだと考えるのが現代的思考であるが、一体能率がよいのだろうか。能率がよいとはどういうことなのか。考えてみると問題があるのである。

たとえば、最近では家庭が核家族とよばれている。夫婦と子供だけであるが、その夫婦も共かせぎの人々が多くなっている。その際子供は保育園にあずけるということは普通になっている。ここにも子供の教育というものに対する思考の仕方のちがいがある。子供の教育というものを自分の家庭の仕事とはしていないという考え方がなんとなく普及してしまっている。そのことが悪いというのではない。そういう子供の生活の場所としての家というものの意味がうすれてしまったのである。そしてそういう場で生活の仕方をしつけるなどということがなくなってしまった。子供はそうすると保育園でほかの家庭の子供と一緒にいるという生活の場で、しつけられる。それは旧い家庭の生活のしつけとは似ても似つかぬものであろう。しかしそういう保育園のしつけが、どうあるべきかということについて、或はそういう条件の所で家庭のしつけがどうあるべきかも、はっきりと自覚されて実施されてはいない。

学校で一人の教師が多くの学習者に教えるというのは一見能率のよいことであろう。しかしそれは教師の数が少なくてすむという点で能率がよいのであって、一人一人の学習者が本当に社会や家庭の生活の仕方を身につけて行っているのかと考えると、あまり能率はよいとは言えない。粗製濫造の手抜きの教育だといえないだろうか。といって、今私は前に述べた昔の形にもどれなどということを行っているのではない。現在から未来にかけては、新しい方式が生み出されなくてはなるまい。学校の今の教育が教育の全てであると考えては、大変な欠陥が生まれる。

それはさておき、現代の教育が教師の能率から観念教育に走って行ったのは、大衆を教育し、大衆を啓蒙するための手段として手抜きをしなくてはならなかったのだということである。人間を育てるのに手抜きはいけないが仕方がなかったのであろう。それが今当り前になっているのである。これはいけない。もう一度根源にもどって、生活の場の行動を形成する教育をつくり直さなければならぬということは至上の命令といってよい。この手抜きの教育を依然として続けるようでは、頭が弱いということになる。手抜きどころか頭抜きである。

### 3 創造性、道徳性の育たない理由はどこにあるか（知性的行動力の貧困の原因）

手抜きの教育に長くなれてくると、不感症になり、それ以外に教育が考えられなくなる。それどころか、大切な生活の中の人間の行動が見えなくなって来る。悪循環におちいつて教育はますます形骸化する。

たとえば自然科学や社会科学の教育を学校では初等教育の段階からやっている。それは現代生活の中で、そういう科学的行動が重要な位置を占めているからである。しかし学校では、そういう行動を形成することは余り重視されていない。教師の能率から言えば教科書があって、それを解説しておぼえておくように言えば、なる程それで啓蒙としては一応すむであろう。しかし、学習する者は、生活の中の行動として科学的に考え、自分の前にある現象を自分の目で見ることができるようにはならないのである。よく言われるように、高等学校を卒業しても、家庭で電気のヒューズ一つがとりかえられないということになる。これをたかがヒューズの問題として見すごすことはできない。そういうように周囲のことに対して盲目であるのでは、たとえばあらゆることにあくどい商人やメーカーの手に乗るということになりかねないではないか。

ましてや最近教育者の合言葉になっている創造性などとは思いもよらないであろう。創造性ということについても現代はあやまった考え方をもっている。本来創造というのは知的な行動だと考えてよいが、その場合の知的というのは、電気の知識をもっているが、ヒューズがとりかえられないという知識でなく、まさにその反対なのである。いわゆる知識というもの、それは言葉で表現されたものであろうが、そんなものをもっていなくても（持つというのとはどういうことかも考えてみる必要があるが）目のヒューズに対して処理できる行動を身につけていけばよい。つまりヒューズを見てそれがどうなっているか、それにわかるものをもって来て、その場所にいれかえる、いれかえるとき、その場をみて電気の動きのシステムをどうとめればよいかというさまざまな神経の使い方ができればよい。それこそがまさに知的とよばれる行動である。それは紙の上の知識ではない。人間の働く神経としての知的行動なのであり、神経の働き方、つまり目や手足や身体の動きが知的なのである。それが人間の行動力としての本当の意味の知力なのである。

こういう知的な行動は本来、いつも創造的なのである。いま目のことに対して神経を働かし、そこで適切な行動を生み出すのである。行動というのは、環境と主体の間のたえざる生み出しとしてあるのである。そういうものが積み上げて行くところに、こんどは、他の人々によって生み出されなかった行動も生まれる。それは結果としてそうなるのである。

観念としての知識は、いつも割り切れている知識として与えられることになる。「これはこうなっている」「これはこうすればこうなる」というようにいつもきまったものとして与えられてしまう。それをそう思いこむことはその人間の外へ出る働きをとぎしてしまうことになる。人間とはこういうものだ、社会とはこういうものだ、自然はこうだときまったように教えられ思いこんだら人間はおそらく探究することをしなくなるであろう。学校生活の十数年にわたってそれを記憶することをしいられた人間がどうなるであろうか。人をみたら泥棒と思えというのも真実であり、渡る世間に鬼はないというのも真実であるが、それは行動の世界のことであって、観念では成立しないのである。どちらか一方にとらわれると、その人間の行動は偏向し固定するであろう。つまり創造的に行動できなくなるのである。

人間の行動力とは観念をもつことによって限定されるので、行動することによって、つまり目や耳や手足を動かして刻々新たな事態に対応することによって、次の事態を生み出して行くのである。それが最も根源的な知的行動であり、それこそが創造性なのである。

このことは一見創造性と全く異ると思われる道徳性の形成にもそのまま当てはまる。

近代教育で最も衰えた教育はモラルの教育であろう。それは最も行動的なものであるにもかかわらず、そういう行動が欠如したからである。これは世界的な現象である。アメリカ大統領のニクソンの非道徳的な行為も、ニューヨーク警察官の90%が汚職をしているというのも、すべてモラルの欠如であるが、われわれが過去百年の間模範としたアメリカがこのような事態にあることをもっと真剣に考察してみる必要があ

ろう。それは近代教育のもっている欠陥への警鐘ともなるのである。

現代教育は観念の授受をするけれども行動を形成しないということをもっと明確に認識すべきである。

近代教育の中で道徳を問題にすると、誰もが陥る落とし穴は自由意志の問題である。近代は自由意志あるいは主体性の問題をただ観念の問題として考え勝ちである。それはカント以来の伝統的な形而上学の影響を受けているからである。環境に対して主体が働きかけるのは、主体の行動の問題であって、観念や意識の問題ではない。主体がいかなる行動をするかは、彼が環境をとらえ、それに反応する刻々の神経の働きであって、抽象的な「何々をすべし」などという観念や意識が決定するのではない。例えば責任ある行動というのは、行動の結果に対してあとから言われることであって、責任感などという意識があって責任ある行動をとらせるのではない。自分の仕事についてたとえば、誰かからそれを頼まれれば、その頼まれるはじめから、その受取り方がちがうのである。頼まれるのがいやならはじめからことわる。頼み事をきくという場合には、もうその事をわが事のように考え行動するという態度で没入するのである。責任を果さなくてはならぬなどという観念があってやるのではない。いわばはじめからその事に向って神経を注ぎこんでいる。その結果を解釈して責任感があるというのである。

また例えば協同して仕事をする、集団の中で働くというのも、協力しようという特別な観念があればそれが成り立つというものではない。人の言うことを聞くときも、人のやるのをみるときも、始終神経を使って仕事をするのである。そういう神経の使い方の全体を協力する態度があるなどというのであって、そう神経が働かないのが協力ができないのである。決して協力しようと思うから協力できるのではない。協力というのも結果としての姿を言い表したことにすぎない。

そういう行動力を明治以来わが国では、言葉の世界、観念の世界のこととしてしまった。行動をすることを通じて、行動の神経を育てなかった。修身と言っても、道徳の時間と言ってもそれはおなじことで、そのような場で、行動する神経は育ちはないのである。このように考えて来ると、われわれの今なすべきことは行動を通して行動神経をつくるというプロセスに、すべての学習を切りかえることでなくてはならぬ。

しかし現代の教師はそれができなくなっているのである。教えるという立場に立つと途端に、自分が自分なりに知っていると思うことをしゃべるのである。それは行動ではなく単なる観念の授受である。それを与えることが行動をつくることだと教師は思っているが、観念を記憶することが行動につながらないと言うことに気付かない。逆に観念が行動を支配すると信じているのである。この逆転が行われなければならぬのである。哲学の転換である。

#### 4 行動形成のシステムの問題は深く広い(態度、知識、技術の分野)

行動形成という点からみると現在の教育は何一つでき上っていないといっても過言でないであろう。行動を形成するというのは行動を通じてなされなければならない。行動する神経回路は行動することによってつくられる。だから行動するという場が学習の場となる。その行動する場が現在の教育では殆んどつくられていない。現在の教育の場は行動をさせない場なのである。観念をいじくり廻すという誠に行動形成にとっては不毛の場である。

何故そうなのかというと、既に何度もふれたように、観念、意識、したがって知識を与えれば行動し得るという迷信があるからである。そういう考えですべての教育を知識を与えるという方式にしてしまった。たとえば道徳的行動を形成するというような目標を頭に描くとする。集団性をつくる、協力の態度をつく

るなどと考えても、そのことを行動としてとらえるという考え方が全くなくなってしまった。たとえ理くつではそれらのことは行動のことだと考えても、実際にカリキュラムをつくり、教育を考えると時には、知識を与えるという学習のシステムになってしまう。どういう場で、どんな行動をさせて、それをどう直してやるかなどというようには考えられなくなってしまっている。

このことは、学校の教科のすべてについて言えることなのである。社会のことを教えるにしても、自然のことを教えるにしても、そういう場実際にぶつかると、社会や自然の知識、いままでに人類が長い間かかって明らかにして、それを言葉にあらわしているそのことを教えることだと思ひこんでしまう。社会や自然の事実にあふれてそれを把握、見るというのはそれをある見方でとらえるということ、つまり自然や社会から、自分の目で神経を使って情報をとるとのことなのである。他人の意見や他人のとらえた情報を正確にとらえるということのも、唯他人の言葉を理解するなどということだけでなく、他人が問題にしている事柄、事実を自分の神経でとらえて、その自分のとった情報との比較をしてどちらが、より正確かというように測定できることなのである。そういう行動が人間に形成されることが、社会や自然を教えるということなのである。となると、どういう社会や自然の事実に向って、それからどういう情報を抽出し、それをどう加工して一つの自然像、社会像をつくるかというプロセスが教育の最も大切なプロセスになる。その行動過程こそが、まさに教育の内容なのであって、現在われわれが内容とよんでいるものとは全く異なるのである。

そうなる、教育の過程は全然つくり直されねばならない。このような問題は何も自然や社会の学習にのみあるのではない。言語の学習についてもそうである。いま国語の教育といわれているものは、言葉を使うという人間の行動を形成するようになっていない。読む、書く、話す、聞くなどと言っているが、そういう行動を形成するためにどんな行動をどんな順序でするかというように考えて、課程がつくられているわけではない。読むなら読むについてあることを教えておく、それを記憶させておけば読む行動ができるであろうと考えて、いろいろな雑多な知識を注ぎこんでいるということである。そうやっても、実際に読むという当の対象、材料に向ったとき、神経が働かないのである。

数学といわれる世界でもそのことは同様である。現代の数学に関する教育は言ってみれば、簡便法という計算法だけを記憶させているようなものである。数というものをわれわれは生活の中で使っている。社会や自然の現象を数の形式によってとらえる、つまり数としての情報にかえる行動をしているのである。その行動が教育では問題にならない。それは自分で応用できると考えているかの如くである。それは数の教育もまた知識教育になっているということである。現代化などというのは、そういう点を改めるのが本質なのだが、わが国ではそれもまた集合論という知識を与えることになっている。数学というものがあってそれを教えるのでなく、数によってわれわれの周囲をとらえるという行動そのものを形成するのである。職業課程などには応用数学などというものがあるが、こういう考え方もおかしい。応用するのではない。生活というものが、周囲のことが数学的に見られ、処理されるので、その情報処理的行動こそが形成されねばならない。逆立ちである。

技術とか技能とかいう分野の教育もまた、行動の形成という点からみると根本的に欠陥をもっている。技術や技能（本来こういう二つの言葉の区別があるのも知識万能論的な考え方から生まれた間違った思想である）というものを、知識とおなじ位相でとらえて、人間の行動形成の大切なものを埋没せしめている。たとえば学科と実習とにわけて教育するというような方式は、知識を与えるという迷信に基づいている。実際に行動をみると、行動の場で対象をとらえて、それに対して反応している。その対象をとらえる場で、とらえ方、見方にさまざまな神経が使われている。そこにはいわゆる知識ではなく、随処に働く知的な測定行動（情報抽出行動、その加工の行動）が働いて居り、それが同時に反射的な表現の行

動と組み合わせられている。そういう行動の形成は、行動のさせ方を一変しなければできない。今のような方式では学科は抽象的な観念で行動と関係ないこと、実習は動物の芸的な無神経的機械的行動を強いる結果になっている。この中で面白いのは戦後に音楽の教育が、稍行動形成の方式にかなって来た（それも極く一部であるが）のは、それが楽器をとりいれ、それを中心にして表現の行動を中心にして、人間を形成しようとしているからであろう。最近の若者の音楽的な能力の進歩、そこからの人間像の全面的な変貌も決して故なしとしないのである。

## 5 転換に対する基礎的な開発の行動に向ってスタートすることが課題である

このように考えると、行動形成のシステムの開発は、大変な問題を含んでいる。それはわれわれの教育の目標に、行動という人間的生命を注入し、観念の形骸となった教育を復活させるところからはじまり、教育の場を知識注入の場から、行動の場に変化させること、従って教科書をはじめ視聴覚教材などの教材の性格と内容の構造の転換、従って教師や学習者の教育の場での交流の仕方、行動の仕方の全面的な転換などが含まれよう。

それらはどれも具体的に探究されることであり、全体として教育工学的手法によって改革することのできるなどという問題でない。しかもそれぞれの分野での具体的な探究となると、それがまた極めて小さな課題をとりあげても相当なエネルギーを必要とする。ちょうど科学の進歩がさまざまな小さな基礎研究を無数に展開して、それらの要素を総合して大きな転換がもたらされるようなものである。そういうシステムの開発の営みをどうするかということが現在のわが国には、全然意識されていない。ちょっとしたアイデアが出ると、それが忽ち教育の現場で実行可能のことのようにブームとなり、右往左往して、しばらくすると影も形もなくなってしまふ。わが国では、教育の技法が流行するが、その積みあげがないと言われるが、むしろそれを積みあげる研究と開発の体制がない。社会も国家もそういう研究の必要性については、全く無知で感受性がない。

かくて現在流行の教育機器導入による教育のシステム化などというものも、それは旧来の土壌の上にかかれた種でしかなく、汚染された土壌でやがて消えてなくなるのであろう。もうぼつぼつその傾向がみえている。教育の機器と称するものが、現代の機械電器的技術を駆使してすぐれたものをもっていても、それが現代教育の中ですべて埋没してしまうのである。過去もそうであったし、今もまたそうである。その根本原因がどこにあるかを、考えて来たのである。その根源へ立ち戻って出発することを早くやらなければ、もうすでに手おくれになっている教育はやがて崩壊するのではないか。今世紀がその転換の期間となるであろう。明日をひらく教育はまだスタートについていないと言うべきであろう。